

1 研究主題

自らの読みを深め、考えを形成する力を育む第6学年国語科学習指導
～問いを中心とした学習展開を通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

文部科学省「これからの時代に求められる国語力」には、「国語教育の大きな目標は、情緒力を確実に育成し、それによって確かな教養や大局観を培うことにある。そして、そのためには情緒力の形成に欠くことのできない読書が特に大切であり、自ら本に手を伸ばす子供を育てる国語教育が必要である。」と示されている。読書は、国語力を形成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」や「国語の知識」のいずれにも関わり、これらの力を育てる上で中核となるものである。読書量の低下が叫ばれている昨今の現状を鑑みて、国語教育を通して、自ら本に手を伸ばす子どもを育てることの重要性が示された。

学校での国語教育で読みのスキルを高め、自分なりに考えを形成する経験を積むことができれば、自ら本に手を伸ばす子どもを育てることに寄与すると考える。そのために、本研究では、自らの読みを深め、考えを形成する力を育成することを目指している。このことから、本研究は現代社会の要請に合致する意義深い研究であると考えられる。

(2) 子どもの実態から

田川郡の子どもの学力は、全国学力・学習状況調査において、全国平均を下回り続けている状況にある。特に、国語科におけるポイントの差は大きい。観点別にみると、「思考力・判断力・表現力等」に課題があることが明らかとなった。質問調査を見ても、国語科の学習に対する意欲が低い状況がある。

本研究で目指す「自らの読みを深め、考えを形成する力」を育成することは、子どもの資質・能力である「思考力・判断力・表現力等」の育成につながると考える。また、問いを中心とした学習展開を構築することで、子どもが主体的に学びに向かうことができる。これらのことから、田川郡の子どもの学力の課題解決につながると考える。

3 主題の意味

(1) 「自らの読みを深める」とは

「自らの読み」とは、子どもが教材に対して主体的に関わり、これまでの学習経験や生活経験をもとにとらえた自分なりの解釈を意味する。さらに、「自らの読みを深める」とは、自

分なりの解釈を友達と交流する中で、新たな視点や違った解釈に触れることを通して、自らの読みを強化したり、付加修正したり、新たな解釈を見いだしたりすることで自らの教材解釈が深まることを指す。

(2) 「考えを形成する力」とは

「考えを形成する力」とは、友達と交流する中で強化、深化された自分の教材の解釈を文章化し、自分の考えを整理する力のことである。

国際化、情報化、価値の多様化が進む現代では、客観的な根拠を示して誰にとっても分かりやすく表現するための論理的思考力・表現力が求められている。その一方、中央教育審議会答申（2016.12.21）では子どもの論理的思考力・表現力における課題が指摘された。本学級児童においても例外ではなく、根拠を明確にしながら、自分の考えを分かりやすく表現できる児童は少ない。思考はできるが、思考したことを整理しながら文章化することに苦手意識を抱いている。このことから、「考えを形成する力」を育成することを目指す本研究は意義深いと考える。

本研究における「自らの読みを深め、考えを形成する力」を身に付けた子どもの具体的な姿を以下のようにとらえる。

- ① 自らの読みを強化したり、付加修正したり、新たな解釈を見出したりして自らの教材解釈を深めた子ども
- ② 学習の中で深まった自分の考えを根拠や理由を明確にして、分かりやすく表現することができる子ども

(3) 問いを中心とした学習展開を通してとは

ここでいう「問い」とは2つの「問い」を意味する。まずは、「単元全体に関わる問い」である。児童が学習に主体的に向かうことができるようにするためには、児童の知的好奇心を喚起することが重要である。児童が「なぜだろう。」「どうすればいいのだろう。」と思うような素朴な疑問を大切に、それらを全体で共有し、解決していくことで、教材を読むことが自分事になる。学習前に「単元全体に関わる問い」を中心に据え、授業を構築していく。

もう一つは、「一単位時間における問い」である。学習の目的を全体で共有し、その後学習計画を立てていく流れを仕組む。まず、学習計画を立てる際に、児童が教材と出合った感じた疑問を集約する。次に、児童から集めた疑問を全体で共有し、解決していく問いを選定していく。「一単位時間における問い」とは、その選定された問いを学習計画の中に位置づけた課題解決に向かうための「問い」のことである。

これらの「問い」を単元及び一単位時間の中に位置づけ、学習を展開することを通して、上記のような子どもの姿が表れるようにしていく。

4 研究の目標

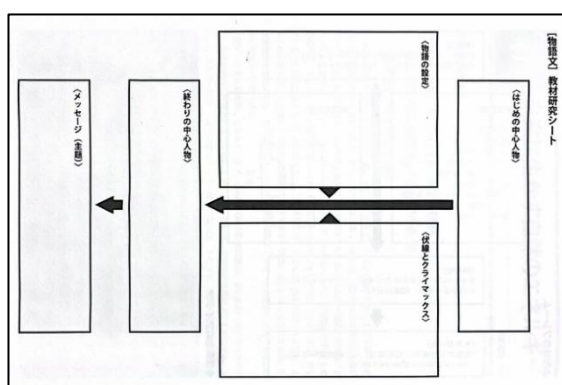
国語科の学習において、自らの読みを深め、考えを形成する力を育むための問いを中心とした学習展開の在り方を究明する。

5 研究仮説

国語科の学習において、次のような手立てを講じれば、自らの読みを深め、考えを形成する子どもを育てることができるであろう。

着眼1 「教材研究シート」と「10の問い」による教材の特性を見出す教材研究

教材研究は教材（ことば）の分析を通して、教材の特性をとらえ、先生が教えたいことを子どもが学びたいことに変えていく作業のことである。教材研究の過程は①教材（ことば）の分析、②教材化である。教材の分析の際に「教材研究シート」【資料1】を活用し、基本的な構造をとらえるようにする。そして、物語のフレームをもとに、教材の特性をより鮮明にとらえるために「10の問い」【資料2】を用いて、さらに教材分析を行う。



資料1 教材研究シート

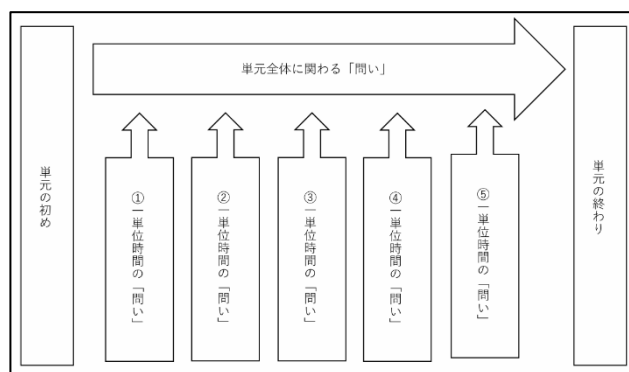
- (1) 題名は何を表している？
- (2) 構成（序破急、額縁構造、ファンタジー構造など）の工夫は？
- (3) 語り手はどこから見てる？（視点の転換は？）
- (4) どんな表現技法（色、比喻、オノマトペなど）が使われている？
- (5) くり返されているものは何？
- (6) 対比されているものは何？
- (7) 矛盾しているところはない？
- (8) 挿絵の効果は？
- (9) どんな語り口？
- (10) 語り手は、なぜ、そう語るの？

資料2 教材分析の「10の問い」

着眼2 「問い」を中心にした単元設定の工夫

本研究では、単元全体に関わる「問い」と一単位時間の「問い」の2種類の問いを単元の中に位置づけて実践を行っていく。

まず、学習に入る前に教材や言語活動との出合わせ方を工夫する。そうすることで子どもの「なぜだろう。」「やってみよう。」という知的好奇心を喚起することができる。具体は、指導の実地で述べる。単元全体に関わる「問い」を全体で共有したのち、教材と出合わせ、疑問を集約し、みんなで解決していく「問い」を選定していく流れをとる。「問い」を選定し、学習計画を子どもと共有しながら作っていくようにする。



資料3 単元構想のイメージ図

着眼3 自己の学びを自覚化できる振り返り活動の設定

本研究では、一単位時間の終わりに本時学習の学びを自覚化できるようにするために振り返り活動を設定する。その際、下記のような振り返りの視点を示し、振り返りの支援を行

う。

1	今日の学習でできるようになったことは何か。
2	学習中に起こった自分の変化や成長は何か。
3	新たな疑問は何か。
4	今日の学びを今後にどういかすか。

6 研究の計画（授業の計画）

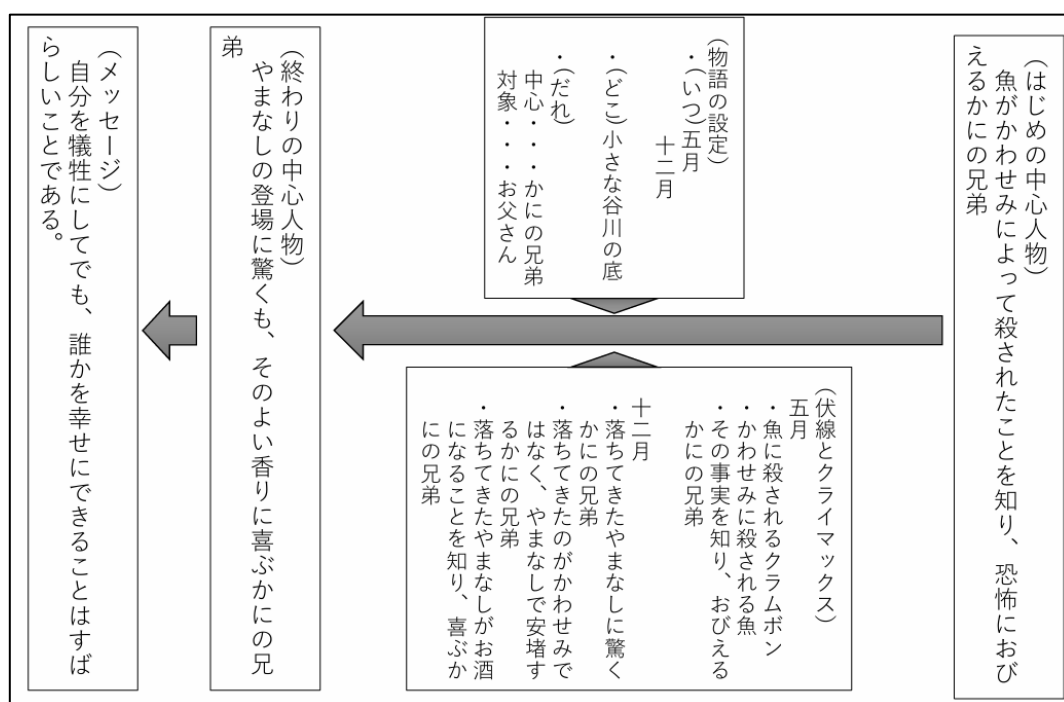
(1) 単元「味わおう！宮沢賢治の世界（やまなし）」光村図書

(2) 単元の目標及び指導計画

単元	味わおう！宮沢賢治の世界	総時数	9時間	時期	10月
単元の目標	○比喩や反復などの表現の工夫について気づくことができる。 (知識および技能) ○人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。 (思考力、判断力、表現力) ○言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、思いや考えを伝え合うことができる。 (学びに向かう力、人間性)				
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点 (援助・支援)	
1 導 入	1	・大まかな内容をとらえる。	・やまなしを読み、感想や疑問をもつ。	・感想を書く際の視点を与える。	
	2	・読後感や疑問から単元全体に関わる「問い」をもつ。	・感想や疑問について話し合い、学習計画を立てる。	・子どもの考えを類別しながら板書する。	
2 展 開	3	・宮沢賢治の生き方や考え方についてとらえる。	・「イーハトーブの夢」を読み、宮沢賢治について知る。	・作者の生き方や考え方がわかる部分を中心に読み、作者を関連付けて読む読み方を伝える。	
	4	・五月の世界について具体的に想像する。	・五月の世界について話し合う。	・場面の様子を図化する。	
	5	・十二月の世界について具体的に想像する。	・十二月の世界について話し合う。	・場面の様子を図化する。	
	6 本 時	・宮沢賢治の生き方や考え方と作品世界を関連付けて、題名の意味を解釈する。	・題名の「やまなし」について話し合う。	・二つの立場を対比の構造で板書する。	

3 終 末	7 ・ 8	・ 作品と作者を関連付けながら読むという視点を生かして、作品を解釈する。	・ 宮沢賢治の作品を読む。	・ 作品を通して宮沢賢治が伝えたかったことは何かという視点で読むようにする。
	9	・ 進んで読書をする。	・ 選んだ作品の感想を全体で交流する。	・ 内容価値と方法価値を明示する。

(3) 【着眼1】「教材研究シート」と「10の問い」による教材の特性を見出す教材研究
教材の基本的な構造を明らかにするために、「教材研究シート」を用いて、以下のように教材分析を行った。【資料4】



資料4 「やまなし」の教材研究シート

教材の基本的な構造をとらえたのちに、上記の「10の問い」を用いて、教材の特性を以下のように分析した。

ア 「五月」と「十二月」の対比

本教材で中心となるのは「五月」と「十二月」で表された二枚の青い幻灯の対比である。五月のかへの兄弟は川底で遊びながら、クラムボンの死、魚の死を目の当たりにし、恐怖にふるえる様子が描かれている。それに対して十二月は同じように川底で遊ぶかへの兄弟の前にやまなしが表れる。よい香りを放ちながら流れていくやまなしが、お酒になることを父から聞いた兄弟は幸せな気持ちになる。「死の恐怖」を連想させる五月と「生の温かさ」を連想させる十二月が対比的に描かれている。

イ 額縁構造による語り

「私」による一人称視点で書かれた外枠と三人称の客観的な視点でかかれた「五月」「十二月」の二枚の幻灯という額縁構造になっている。この二枚の幻灯を通して、作者が伝えたかったものは、題名の「やまなし」である。宮沢賢治の額縁構造による語りと題名を関連付けて読むことで作者のメッセージをとらえることができる。

ウ 作者独特の優れた表現

「やまなし」には、宮沢賢治の独特の世界が表現されている。作者ならではの造語や擬態語・擬音語、情景描写などが随所にちりばめられている。一読しただけでは作品世界をとらえることは難しいが、作者の生い立ちや考え方などを関連付けて読むことで、作品世界を豊かに味わうことができる。

7 指導の実際

(1) 単元の導入段階

【着眼2】「問い」を中心にした単元設定の工夫

ここでは、単元全体に関わる「問い」と各一単位時間の「問い」をどのように選定し、学習計画を作成したかを述べる。

本教材は作者独特の表現が多いため、子どもは作品世界をとらえることが難しいだろうと教材研究の段階で予想をしていた。しかし、その難しさこそが子どもの「なぜだろう。」「読んでみたい。」という知的好奇心を喚起することができると思った。そこで「宮沢賢治の作品を読み味わう。」という読む行為自体を単元全体に関わる問いとして設定する流れを構想した。まず、教材と出合わせてみることから始め、感想を交流した。子どもの感想は以下のようであった。

- ・言葉の意味がよくわからないところがあって、物語全体も意味が分からない 5人
- ・よくわからないけど、こわい感じがする。 6人
- ・かへの親子はよくいる幸せな家族を表しているような気がする。 1人
- ・物語の中に暗いところと明るいところがある。 1人
- ・12月は面白い。 1人
- ・戦争がテーマになっているような気がする。 2人
- ・暗い物語。 1人
- ・不思議な感じがする。 1人
- ・不気味な感じがする。 1人
- ・悲しい感じがする。 1人
- ・死がテーマになっている。 1人

これまでの学習を生かして自分なりの解釈をしようとしている姿が見られたが、既習の教材とは違うテイストの物語であることから、物語の世界を想像することに難しさを感じている様子が見受けられた。そこで、「宮沢賢治は『やまなし』で何を伝えたかったのだろう。」と子どもに問いかけた。すると、「物語の世界がよくわからないので、みんなで考えたいです。」と反応が返ってきた。そこから、「味わおう！宮沢賢治の世界」という単元全体に関わる問いを設定していった。

次に、疑問を交流した。子どもの疑問は以下のようであった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・なぜ、クラムボンは急に死んだのか。 4人・なぜ、題名が「やまなし」なのか。 1人・なぜ、かわせみはかにたちに構わないのか。 1人・クラムボンとは何か。 7人・なぜ、5月から12月になったのか。・「かぶかぶ笑ったよ。」とはどういう意味か。 1人・水がサラサラ鳴ったとはどういう意味か。 1人・ゆらゆらとかもかもかとかいう表現が多いのはなぜか。 1人・やまなしとは何か。 1人・底の黒い三つの影法師とは何か。 1人・表現の仕方が独特なのはなぜか。 1人・なぜ、5月と12月の視点なのか。 1人 |
|--|

子どもから挙げた疑問を集約し、言葉の意味を調べれば解決できるものや、読んですぐに解決できるものはその場で解決をし、残った疑問を分類していった。

○登場するものに関して

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・やまなしとは何か。→ 山に自生する梨。・クラムボンとは何か。→ 作者の造語で意味はわからない。・黒い三つの影法師とは何か。→ かにたちの影のこと。 |
|--|

○物語の中で起きた出来事について

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・なぜ、クラムボンは急に死んだのか。→ 魚に殺されたから。・なぜ、かわせみはかにたちに構わないのか。→ 捕食対象ではないのではないかと？ |
|---|

○表現方法について

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・かぶかぶ笑ったとはどういう意味か。→ 宮沢賢治の独特の笑い方を表す表現・水がサラサラ鳴ったとはどういう意味か。→ 宮沢賢治独特の表現・ゆらゆらとかもかもかとかいう表現が多いのはなぜか。→ オノマトペという表現が多いのは宮沢賢治の作品の特徴。・表現の仕方が独特なのはなぜか。→ 宮沢賢治の作風。 |
|--|

○物語全体について

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・なぜ、5月と12月の視点なのか。→ わからない。・なぜ、題名が「やまなし」なのか。→ わからない。 |
|---|

全体で問いを精選していく中で「なぜ、5月と12月の視点なのか。」「なぜ、題名が『やまなし』なのか。」という2つの大きな問いが残った。この大きな二つの問いを解決していくにあたり、宮沢賢治という作者自身の生い立ちや考え方などを知ることが物語を読み解く鍵になることを教えた。そこから、下記のように学習の計画を立てていった。

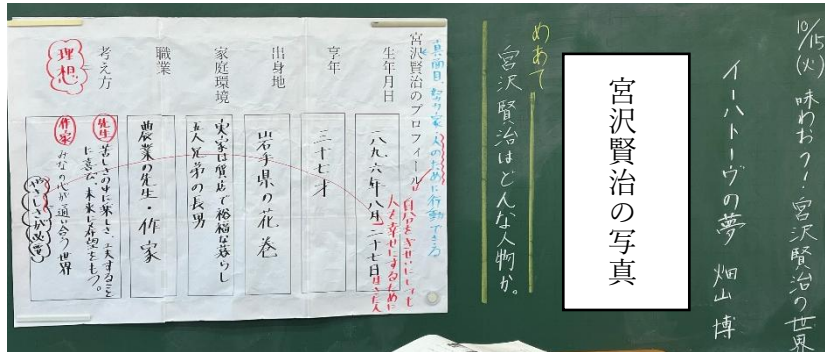
① 宮沢賢治はどんな人物なのか考える。

② 5月はどんな世界なのか考える。

- ③ 12月はどんな世界なのか考える。
- ④ 「やまなし」という題名について考える。

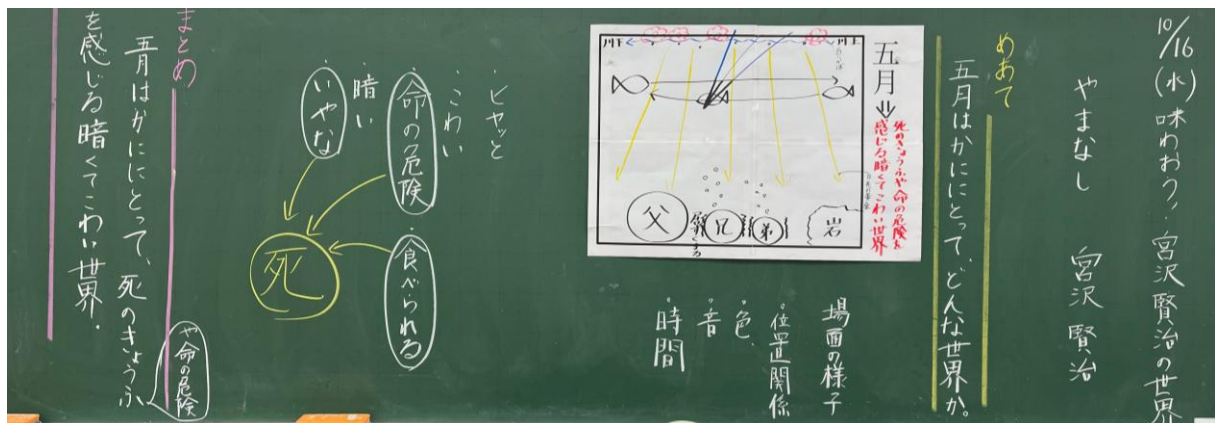
(2) 単元の展開段階

展開では、作品世界をとらえることができるようにするために、資料「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生い立ちや考え方などを整理する活動を行った。



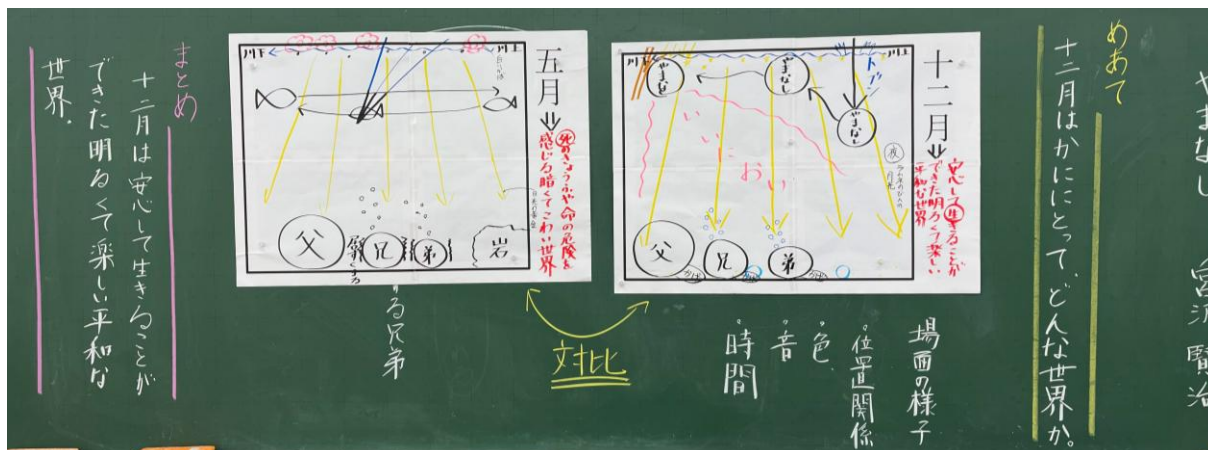
これは、第2次3時目の板書である。ここでは自己を犠牲にしても人の幸せを願う宮沢賢治の考え方について中心に話し合った。

次に、「5月はかになにとってどんな世界か。」という問いで話し合う活動を設定した。



物語の場面を具体的に想像しやすくするために、かにや魚、かわせみの位置関係を簡単な図で整理したり、場面の様子がわかる叙述をもとにイラストを描き加えたりして一枚のシートを作成した。そのシートをもとに話し合う中で「5月はかになにとって、命の危険を感じる場面だ。」「食べられるという恐怖があり、暗くこわい感じがする。」などの意見が挙がった。そこから、「5月はかになにとって、死の恐怖や命の危険を感じる、暗くてこわい世界である。」と学習をまとめた。

次に、「12月はかになにとってどんな世界か。」という問いで話し合う活動を設定した。



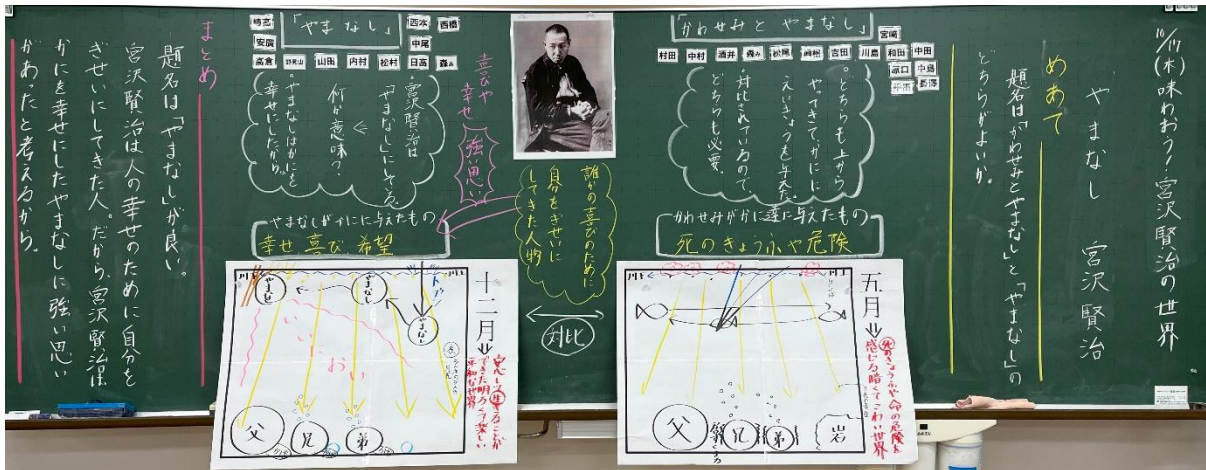
前時と同様に登場人物の位置関係や場面の様子を一枚のシートに記入していった。シートをもとに話し合う中で、「やまなしの登場によって、かへの兄弟たちは幸せな気持ちになることができた。」「全体的に明るい感じがする。」などの意見が挙がった。そこから、「12月はかへにとっても、安心して生きることができた、明るくて楽しい平和な世界である。」と学習をまとめた。

(3) 検証授業

第2次の6時目を本研究の検証授業とし、着眼に沿って指導計画を作成した。以下のような計画で授業を行った。

- 1 主眼 作者が題名を「やまなし」とした理由について話し合う活動を通して、作者の生い立ちや考え方と作品世界を関連付けて、物語の全体像をとらえることができる。
- 2 授業仮説 展開段階において、題名について話し合う中で、「宮沢賢治はどんな人生を送った人物だったか。」と問うことで、「やまなし」という題名にこめた作者の思いを想像することができる。

	学習活動・内容	指導上の留意点 (◇) 評価規準 (方法)
導入	<p>1 前時学習を想起し、本時学習のめあてを設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・五月の世界 ・十二月の世界 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>めあて 題名は「かわせみとやまなし」と「やまなし」のどちらがよいか。</p> </div>	<p>○ これまでの学習内容を想起できるように、前時学習までの板書の写真を電子黒板に写す。</p>



3 考えを交流する。

作者である宮沢賢治はどんな人でしたか。

常に人を喜ばせるために尽くしてきた人だった。そんな賢治だから、かへの兄弟を喜ばせた「やまなし」には強い思いがあったのかもしれない。

ができるようにするために、宮沢賢治の生き方や考え方について問う。

4 本時学習のまとめをする。

まとめ
題名は「やまなし」がよい。自分を犠牲にして人に尽くしてきた賢治だから、かへの兄弟に喜びを与えた「やまなし」に強い思い入れがあったと考える。

5 学習の振り返りをする。

◇ 題名にこめた作者の思いに気付いている。(ノート・発言)

○ 児童が本時学習の学びを自覚できるように振り返りの視点を示し、ロイロノートのアンケート機能を使って振り返りを行い、全体で共有する。

終末

これは、上記の本時「題名は『かわせみとやまなし』と『やまなし』のどちらがよいか。」の板書である。ここでは検証授業における教師の働きかけと児童の反応を抜粋して示す。【資料5】

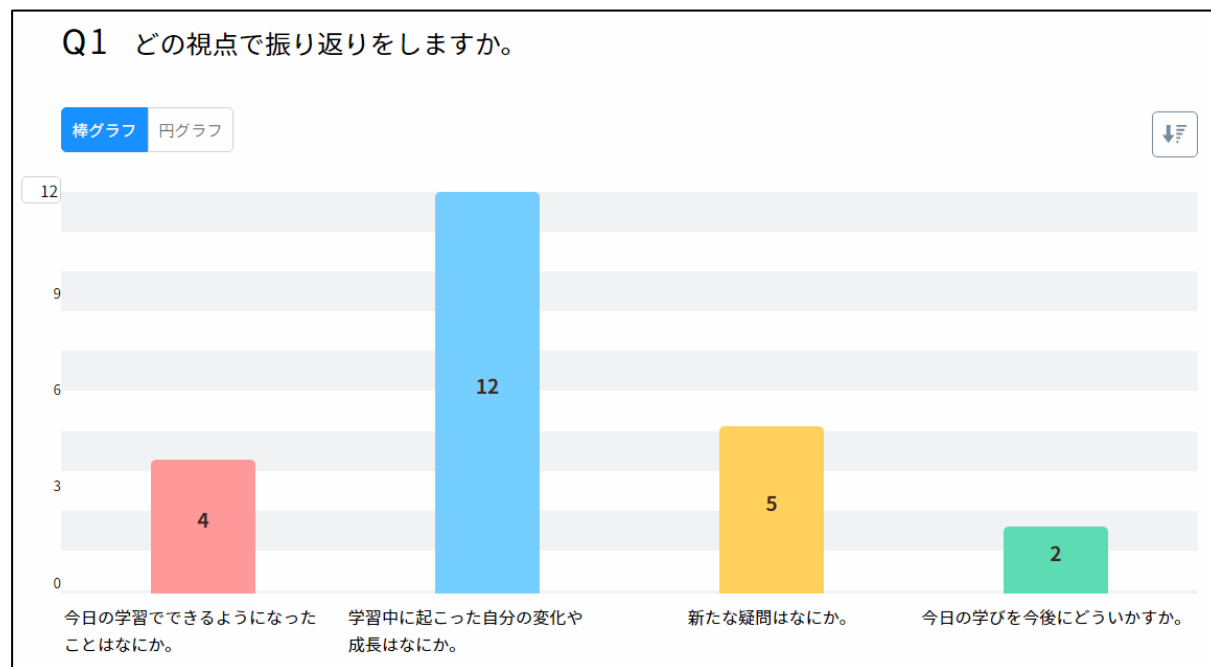
教師の働きかけ	子どもの反応
<p>(前時までの振り返りをした後)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かわせみもやまなしも上からやってきて、かにたちに何らかの影響をもたらしたことは共通していますね。では、題名は「かわせみとやまなし」でもよいのではないですか。 <p>(波線部の意見を取り上げながら)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作者である宮沢賢治はどんな人生を送った人物でしたか。 	<p>(自分の考えを書きまとめる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かわせみとやまなしが良いと思います。どちらも上からやってきて、かにに影響を与えているからです。 ・5月と12月は対比されていました。だから、どちらも必要だと思います。 ・やまなしが良いと思います。<u>作者が「やまなし」と決めたのだから、何か意味があると思います。</u> ・やまなしはかに達を幸せにしたから「やまなし」が良いです。 <ul style="list-style-type: none"> ・誰かの幸せのために生きてきた人です。 ・自分を犠牲にしてでも、人のために尽くしてきた人でした。 ・<u>そんな宮沢賢治だから、「やまなし」に強い思い入れがあったと思う。</u> ・<u>かに達に幸せを与えた「やまなし」が宮沢賢治の生き方に似ている気がする。</u> <p>(話合いが続く)</p>

資料5 検証授業における教師の働きかけと児童の反応（抜粋）

上記波線部に示したように、宮沢賢治の生い立ちや考え方と作品世界を関連付けて、物語の全体像を想像することができたと思われる児童の反応が表れた。しかし、学習の最後に書かせたまとめでは、作者と作品世界を関連付けて考えられておらず、題名も「かわせみとや

まなし」がよいと書いている児童が数名いた。また、一部の児童の発言だけで授業で取り上げることができなかった。

最後に、ロイロノートのアンケート機能を活用して振り返りを行った。4つの視点の中から自分で選択をし、学習を振り返った。資料6はアンケートの結果である。（ロイロノートを活用した学習の振り返りは第一次から行っている。）



資料6 検証授業時の児童の振り返り

視点 (人数)	内容
今日の学習のできるようになったことは何か。(4人)	<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝わりやすく考えと理由を書くことができた。 友達の意見を取り入れて自分の考えを書くことができた。
学習中に起こった自分の変化や成長は何か。(12人)	<ul style="list-style-type: none"> 誰かの幸せのために、自分を犠牲にするという作者の強い思いが題名に込められていることに気付けた。 最初は物語の意味が分からなかったけど、みんなと勉強していく中で意味がわかって楽しかった。
新たな疑問は何か。(5人)	<ul style="list-style-type: none"> なぜ、かわせみにしたのか。 5月のかわせみがいたから、12月のやまなしが際立つという意見を聞いて、「かわせみとやまなし」のほうが良いのではないかと思った。
今日の学びを今後どう生かすか。(2人)	<ul style="list-style-type: none"> 作者と題名をつなげて考えると、作者の強い思いがあることが分かった。このやり方を生かして読んでいく。

上記のように、子どもたちは視点を選択し、学習を振り返る姿が見られた。学びの自覚化

を目指した振り返りの支援は有効であったと考える。しかし、この振り返りをその後の学習で有効に活用することができていない。学習の振り返りが次時につながるような支援の工夫が必要である。

(4) 単元の終末段階

単元の終末では、「やまなし」で学習した作者と作品世界を関連付けて読む方法を生かして、宮沢賢治作品を読み、作品のメッセージをまとめる活動を設定した。関連図書のコーナーを教室内に設置し、いつでも読めるように環境を整えた。しかし、読書の時間を十分に確保できなかったため、作者と作品世界を関連付ける読み方を引き出すことができず、選択した物語のあらすじをまとめるだけに留まってしまった。宮沢賢治作品を自力で読むことに困難さがあったと考える。数ある作品の中からいくつかを選定したりグループごとに読み深めるなどの活動の工夫が必要であった。

8 研究のまとめ

本研究で取り組んだ「問いを中心とした学習展開」は、自らの読みを深め、考えを形成する力を育むうえで有効であったと考える。問いを中心に据えることで考えが生まれ、考えを伝える中で対話が生まれ、対話の中から新たな気づきが生まれるからである。資料5に示したように、読みを交流する中で自分の考えを深めることができたと考える。

しかし、一部の児童の発言によって学習が進んでしまったり、読みの力に個人差があり、学級全体での深まりには至らなかったりすることがある。これは、学習者のレディネスをそろえられていないことや、問いの質が子どもの実態にそぐわないことなどが原因であると考えられる。今後の実践では、質の高い問いを生み出すことやその問いを解決するためのレディネスを整えることなどに取り組んでいきたい。そのためにも、綿密な教材研究と実態把握を心掛けて実践に臨む。

9 成果と課題

(1) 着眼1 「教材研究シート」と「10の問い」による教材の特性を見出す教材研究

○ 「教材研究シート」を基に物語の基本的な構造を把握し、「10の問い」で教材の特性を見出すことで、教師が物語を教材化することができた。

● より深い教材研究をし、質の高い問いや児童の実態に合う問いを生み出す必要がある。

(2) 着眼2 「問い」を中心にした単元設定の工夫

○ 単元全体に関わる問いを設定することで、教材を読む目的をもたせることができ、学習意欲の喚起に繋がった。

○ 一単位時間の問いを設定することで、問いに対しての考えを持たせることができ、考えの交流から対話を引き出すことができた。

● 一部の児童の発言で学習が進んでしまうため、全体で対話を生み出す支援の工夫が必要である。

(3) 着眼3 自己の学びを自覚化できる振り返り活動の設定

- 振り返りの視点を示すことで、児童に学習の振り返りを促すことができた。
- 4つの視点を示すことで、様々な振り返りを引き出すことができた。
- 学びの自覚化を促すだけでなく、今回の学びを次時にどう生かすか具体的な支援の方法を考える必要がある。

◎ 参考文献

- 香月正登『教材研究シートの活用』、東洋館出版、2013年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』、東洋館出版、2019年
- 西郷竹彦『ものの見方・考え方を育てる小学校六学年・国語の授業』、
新読書社、2011年